

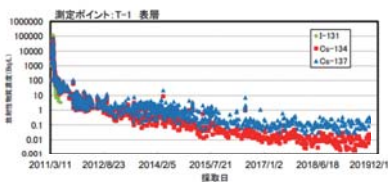
海水及び海底土の放射性セシウム（セシウム137）のモニタリングを、2011年10月以降、文部科学省（原子力規制庁設置まで）、原子力規制庁、水産庁、海上保安庁、環境省、福島県、東京電力（株）が連携して行っています。放射性セシウムの分析のみならず、放出口付近（採取ポイント：T-1、T-2）の試料に関しては、放射性ヨウ素（海水のみ）、放射性ストロンチウム、プルトニウム、トリチウム（海水のみ）についても分析されています。

図は事故当初の海域モニタリング結果です。

本資料への収録日：2013年3月31日

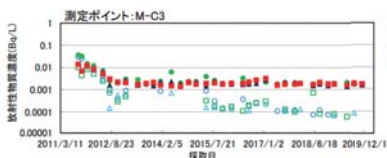
改訂日：2019年3月31日

福島沿岸の海水の放射性物質濃度の推移

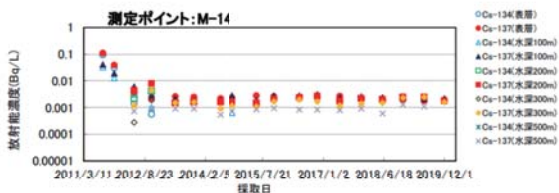


福島県沖合の海水の放射性物質濃度の推移

表層：海面～2m程度、中層：深度50mまたは100m、底層：海底～40m



外洋海域の海水の放射能濃度の推移



震災後から2019年12月1日まで ※測定ポイントについては、下巻P43「海水と海底土の濃度（2011年度）」参照

原子力規制委員会海洋モニタリング結果 <https://radioactivity.nsr.go.jp/ja/list/428/list-1.html>

放射性セシウムが付着した土壌は川を經由して沿岸まで運ばれます。

東京電力福島第一原子力発電所近傍の海水の放射能濃度は、事故直後は10万 Bq/Lに上昇しましたが、希釈、拡散の効果により1か月半後にはその1,000分の1である100Bq/Lに下がり、一年半後には10Bq/L、さらに現在では1 Bq/L以下にまで下がりました。

事故から半年後には、沿岸からの放射性セシウムを含んだ土壌が陸地から30kmの沖合まで運ばれましたが、沖合の測定ポイント M-C3の濃度は0.05Bq/Lと沿岸濃度の200分の1まで薄まっています。一般に、海底では放射性セシウムの一部が沈降し放射能濃度が高くなると想定されますが、2012年には海底近くでも0.008Bq/Lまで下がっており、表層や中層も下がっています。

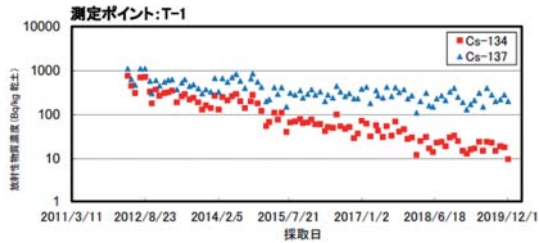
陸地から180km離れた外洋の測定ポイント M-14では、事故から半年後でも表層の濃度が30km 沖合の濃度と同じ程度の0.1Bq/Lとなっています。事故から2年後には、0.001Bq/L とさらに2桁下がっています。

(関連ページ：上巻 P185「海洋中の放射性セシウムの分布」)

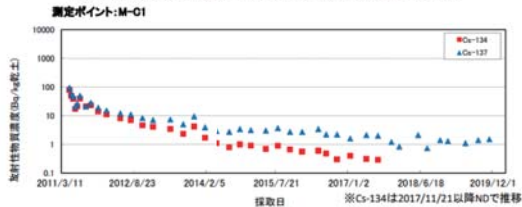
本資料への収録日：2014年3月31日

改訂日：2022年3月31日

福島近傍・沿岸の海底土の放射性物質濃度の推移



福島県沖合の海底土の放射性物質濃度の推移



震災後から2019年12月1日まで ※測定ポイントについては、下巻P43「海水と海底土の濃度（2011年度）」参照
原子力規制委員会海洋モニタリング結果 <https://radioactivity.nsr.go.jp/ja/list/428/list-1.html>

東京電力福島第一原子力発電所近傍の沿岸の海底土を乾燥させて測定した結果、当初はセシウム134、セシウム137ともに1,000Bq/kg程度ありましたが、事故から2年後には、セシウム137は500Bq/kgと半減し、セシウム134は200Bq/kgと5分の1になりました。（測定ポイント T-1）

陸地から40km沖合（測定ポイント M-C1）の海底土の放射能濃度は、事故当時100Bq/kgに上昇しましたが、1年後には10Bq/kgまで下がりました。

（関連ページ：上巻 P185 「海洋中の放射性セシウムの分布」）

本資料への収録日：2014年3月31日

改訂日：2022年3月31日